

18 掛川古道を歩く東海道の魅力を探して

(小夜の中山～日坂宿～掛川宿～間の宿原川)

旅人 高井豊 鈴木克美 岡田三郎 高橋和子 田邊もとい

慶長6年(1601)に東海道が制定以来多くの人々がこの道を往来し、平和が続いた江戸時代には、お伊勢参りや秋葉山へと庶民が旅を楽しんだ時代でもあった。その東海道が、掛川には東は峠の三大難所の一つと云われる小夜の中山から西は間の宿原川まで通っている。

私たち「魅力さがし隊」は、その庶民の道として現在まで残っている古道である東海道を遠い昔に思いを馳せながら歩き、古きを訪ね新しい発見を探す、掛川特産物(品)を食べる・見ると今昔を対比しながら現在の旅人になって新しい発見を求めて見ようと思い、計画実行した。

もう一つは、この活動を、ユーチューブにアップすることにより、古道東海道を視聴した人がなにか一つでも発見し、古道東海道の魅力を探して行動してもらえればと願っている。

それでは、私たち「魅力さがし隊」の魅力をさがした道中記のはじまりだ。

旅のはじまり、**小夜の中山久延寺**といえば、徳川家康が山内一豊に命じて観音堂を建立した寺であり、夜泣石伝説にまつわる子育て観音としても有名。この寺と徳川家康との関係は有名で、家康が会津の上杉景勝を征伐に向かうとき小夜の中山の久延寺の茶室にて接待したという記録の石碑や茶室跡も残っている。



それにまつわる食べ物に「飴の餅」があり、関ヶ原の戦いのおり山内一豊が徳川家康に、名物の「飴の餅」と茶を献上したことから、家康が大変気に入り「御開運の飴の餅」と名付けたとか。この飴の餅に関しての元祖・本家争いなどもあり、当時は小夜の中山名物として名が通っていたようだ。2015年には、家康400回忌にあわせて金谷のお菓子屋が再現、「家康公の勝鬨(かちどき)餅」としてイベントでの販売をおこなったようで、私たちも食べるという活動から、期待したのだが・・・



代わりに小夜の中山名物の**夜泣石子育て飴**をいただく。箸の棒に丸めた麦芽の飴は素朴な味がして、ちょっぴり昔の旅人の思いをはせることが出来た。子育て飴はここ、久延寺横の扇屋と旧国道1号線沿いの小泉屋で買い求めることが出来る。

小夜の中山峠は難所と言われ、**西行法師をはじめ、たくさんの歌人**がうたを残している。それらの歌碑のうたをよみながら寂しく険しい山中を日坂宿へとすすめば難所といわれる沓掛の二の曲がりを経て宿場町に到着する。



西行法師歌碑

日坂の宿場町は約700mの距離の町並みで、天保11年(1840)の宿場の図によればSの字に曲がった道沿いに鰻の床の家並みがひしめくように建てられ、ここに本陣、脇本陣のほか旅籠



蓮生法師歌碑

屋が33軒あり、小さな宿場町でありながら東の大井川の川止めなどで、華のまちとも言われかなりの賑わいがあったようだ。



この日坂宿には江戸末期の貴重な建物、**大旅籠川坂屋**、小旅籠萬屋、問屋役宅藤文の3軒が大事に保存されている。特に江戸の棟梁を招いて建てられたという川坂屋の上段の間の室内は精巧な木組みや細かな格子が特徴的であり、二階の表格子の上に彫られた透かし彫りの秋から冬にか



けての夕日が抜ける**影絵**は見た人だけが味わえる感動の光のショーだ。

裏手には、掛川市指定有形文化財建造物の**川坂屋茶室**がある。この茶室は、文化2年(1805)掛川城主太田侯により「掛川偕楽園」に建てられたもので、明治元年(1868)川坂屋に譲られた物。掛川市誌に詳しく書かれていて、茶室は六畳二間で洞庫が設けられており、床柱はめずらしいそめつつじの巨木で、「水戸偕楽園の何陋庵」の床柱と二分されたものと伝えられている。



日坂宿場名物に**わらび餅**がある。屋号石屋さんは江戸時代この地で商売をしていた。幸いにも現代まで作り方を受け継いでいる内田さんのご厚意で、今はなかなか食することが出来ない貴重なわらび餅を、私たちメンバーは食することが出来た。



石屋さんのわらび餅は現代の冷やして食べる物とは違い、ゆでて温かくしたもので色は黒くもちもちとして、細長くちぎったような形でなんともいえぬ食感だ。

日坂の静かな場所でたくさんの素晴らしいものを発見や体験できたことは驚きだった。

東海道三大難所のひとつ小夜の中山峠をくだり、疲れた足取りで訪れた日坂宿の家々に掲げられた屋号の看板を見ながら、道なりに歩く宿場通りは訪れる人びとに、他所では見られない江戸時代の風情を思い出させる景色ではないかと感じつつ、私たちはさらに西へと進む。



遠江一の宮式内事任八幡宮。その昔、日坂の古宮の地にあったと言われる八幡宮は、現在は宮村の地に遷座され、全国一宮の一つでもあり、昨今のパワースポットのブームに乗り若者からお年寄りまで多くの人々で賑わうようになった。また思いのままに願いが叶うと言われ信仰されている。平成19年（2007）には御遷宮1200年を迎えるという古き神社でもあり、遠い昔から旅人の安全を託すということから、多くの旅人が旅の安全を祈願し手を合わせていったとのこと。

秋には境内にある大イチョウの木が金色に染まり、イチョウの葉が絨毯のように散り積もった情景は訪れる参拝者に厳かな気持ちを感じさせる静寂な境内にぴったりである。

さらに、ここには遠州祭り囃子保存会中遠竹友会が昭和24年に奉納されたという大笛が飾られていて、毎年秋の祭典で大笛祭が開催されるとのことだった。境内に集まる遠州地方ではめずらしい朝顔屋台の練りの賑わいを想像しつつ、大楠の木の境内をあとに、心洗われた気持ちでさらに西へと歩いていく。



東海道膝栗毛で弥次喜多の喜多さんが川に落ちた塩井河原が見えてくる。川の向こうに塩井神社があり、川底から塩水が吹いたともいわれている場所でもある。

この先、左手を少しいくと、右手に伊達方の一里塚が見えてくる。さらに進むと、旧国一と交わり、目の前の小高い山の中腹に石川依平の眠る墓がある。依平はここ伊達方に生まれ、歌人として名高く



看板には地元を詠んだ詩として『ささ波も 紫だつと 見るばかり こなぎ花咲く 鞍骨の池』と書かれている。



この先はただただ、掛川宿を目指して歩いていく。途中、千羽（左に掛川市農協）の交差点を左に進むと、依平が詠んだ鞍骨の池を見ることが出来る。寄り道をして元に戻り進むと、やっとの事で馬の顔の欄干の馬喰橋が見えた。橋を渡り右側に振り袖餅なる看板を見つけ、早速店先をのぞき掛川名物の振袖餅を皆でほおぼる。大福のような餅は歩き疲れた私たちの体を癒やしてくれた。さあ、ここからは掛川宿、掛川城に向かって頑張るぞと歩き始めてしばらく進むと、東海道七曲がりの看板を見つけ、道なりに曲がりを歩いていく。簡単に敵を侵入させないための



七曲がりの道の作りに感心しながら、さらには塩の道の道標を見つけ、相良町の太平洋から昔はここを通り北遠、信州、さらに糸魚川へと続く塩の道だと聞き、遠い昔に想いをはせることが出来た。



城下に入り、青森ヒバを使用し平成6年4月に復元された本格木造作りの**掛川城**を見学。掛川城で私たちが思い浮かべるのは山内一豊で、内助の功妻千代との話ではないだろうか。千代が差し出したお金で一豊が買った馬を信長が目にとめ、ここから一豊の運が開けたといわれている。

城内で見ておきたいものに伝説の**霧噴きの井戸**がある。家康の城攻

めの時、井戸から立ちこめた霧が城を覆い隠し徳川軍は攻撃が出来なかったとか。以来掛川城を「雲霧城」とも言われているとのこと。



周辺の**二の丸御殿**、掛川城大手門、龍華院など貴重な建物を見てまわることも出来た。

突然だが掛川の葛布を知っているだろうか。**日本三大古代織（芭蕉布、しな布、葛布）**のひとつといわれる

葛布は、江戸時代から盛んにこの地域で織られていたようで、外国にも輸出されていたとのこと。日坂や掛川では昭和のある時期まで家並みのあちこちで葛布を織る、はたおりの音が響き、葛布問屋さんもたくさんあったそう。ここ掛川には現在も貴重な**葛布店**が残っていて、お店に飾られた日傘、帽子やバックなどファッション小物の素材に使用されたものを見ると、葛布の美しい光沢に感動する。外国ではブラインドの代わりに使用され喜ばれているというTVでの情報もあった。



さらに西へ歩いていくと、広重の浮世絵で掛川を描いた秋葉山遠望の**大池橋**にたどり着く。ここには、秋葉神社掛川遙拝所があり東海道と秋葉街道との分

岐点になっている。広重の絵を見比べながら私たち一行は左方向に足を向け、間の宿原川へ。

原川の松並木が続く道は昔の面影を残し、のんびりと昔の旅人気分で行くことができる街道だ。



さらに進むと原川「間の宿」。掛川宿、袋井宿のほぼ中間に位置するここ原川は旅人相手の茶屋、酒屋などが軒を連ねていた間の宿であり、この地の**金西寺は本尊が阿弥陀仏**で「足痛薬師如来」といわれ、当時は原川の薬師さんと親しまれていたようだ。周辺には薬師餅を売る茶屋などが軒を連ね、東海道を旅する人々がこの餅を買い供えて道中、足の痛みに悩まされないようお参りをして行ったとのこと。



こうして私たちは、間の宿原川の昔の賑わいを想像しながら、自転車屋のおじさんの話をきいたりして東海道の旅が終わった。

私たちは「魅力さがし隊」の目的の、歩いて食べて新しい発見を掛川古道東海道で見つけ楽しい時間を作ることが出来た。

掛川市には先人の残してくれた素晴らしい史跡や建築物、食べ物など私たちの知らないことがまだまだたくさんある。ぜひ、この機会に皆さんも興味を持った箇所から訪れ楽しんでみては。きっと素晴らしい発見があり、掛川に住んで良かったと思うのではないだろうか。